

平成28年(2016)1月15日

編集・発行
書学書道史学会
会報委員会

〒166-8531
東京都杉並区和田3-30-22
大学生協学会支援センター内
TEL: (03) 5307-1175

FAX: (03) 5307-1196

メールアドレス:
shogaku@univcoop.or.jp

第二十六回 書学書道史学会大会を終えて

橋本 貴朗

十月三日・四日の二日間にわたり、國學院大學・渋谷キャンパスの常磐松ホールにおいて、第二十六回書学書道史学会大会が開催されました。両日あわせて、二〇〇名を越える御参加をいただきました。会場校として、厚く御礼申し上げます。また今回、

本学の諸事情により、十月の開催となりましたこと、そのために御参加できなかった方々に、深くお詫び申し上げます。

本大会では、総会・研究発表のほか、一日目に本学文学部の佐野光一教授による講演会「漢隸の成立」を企画いたしました。各種の書体字典の編纂に携わり、大著『木簡字典』で知られる佐野教授ならではの、長年の研究成果に基づく、含蓄に富んだお話を御披露くださいました。ただ、当日は会場側の不手際から、音声のお聞き取りづらい点のありましたこと、

この場をお借りして、改めてお詫び申し上げます。講演の要旨が本号に掲載されており、ぜひ御覧ください(講演録は、次号の『書学書道史研究』に掲載の予定です)。本講演会は聴講無料の一般公開として行われ、五〇名以上の会員外の御来場がありましたこと、あわせて御報告いたします。

二日目・昼休みの國學院大學博物館の参観にあたっては、学芸員による展示解説も実施いたしました。博物館の年間スケジュールの関係で、残念ながら大会開催にちなんだ特別展示は叶いませんでしたが、赤井益久学長はじめ大学当局の御理解を得て、特別展「江戸のベストセラー『唐詩選』の世界」の会期の前倒しが実現し、お目に入れることができました。

本学は、有栖川宮幟仁親王を初代総裁とする皇典講究所を母体とします。博物館の校史ブースでは常時、有栖川宮家に伝えられた書流・有栖川流の展示をしており、館側の配慮により、当日は普段よりも多数陳列していただきました。ともども、お楽しみいただけましたら、幸甚に存じます。また会場では、種々の貴重な御教示を賜りました。御礼申し上げます。

研究発表では、一日目に中村健太郎氏・中村史朗氏、二日目に安生成美氏・野中直之氏・金貴粉氏・下田章平氏・林淳氏・橋本栄一氏・成田健太郎氏の計九名の方が、日頃の研究成果を発表されました。本学ゆかりの有栖川流に関する発表にはじまり、時代は古代から近現代まで、対象地域も日本・中国・朝鮮半島と東アジア全域に及ぶもので、まさに多彩かつ充実した内容でありました。発表後の質疑応答も活発に行われ、問題の深化と共有がはかられたように思います。発表内容の詳細につきましては、事前に配布されました大会案内を御参照ください。

一昨年度の跡見学園女子大学、昨年度の花園大学と同様に、本学も書道を専攻する大学院生はおりません。日本文学科の学生有志が手伝ってくれましたが、御案内等、至らない点があったことと思います。また、最寄りの渋谷駅が目下、再開発の工事中で、御不便をおかけいたしました。重ねて、お詫び申し上げます。

大会の開催にあたり、澤田雅弘理事長、萱のり子国内局長、高城弘一事務局長ほか、多くの先生方のお力添えを賜りました。とりわけ幹事の先生方には、当日の運営につきまして、大変お世話になりました。会員の皆様の御協力のおかげで、何とか大過なく大会を終えることができました。心より御礼申し上げます。

(幹事・会場校責任者)



講演会「漢隸の成立」要旨

佐野 光一

本講演は、古代書体の秦篆や秦隸とは一線を画し、近代書体と位置付けられる漢隸の成立時期に関して、これまで語られてきたよりも早い、武帝晩期と捉えられることを、秦篆、秦隸、漢隸の主な資料を図示しつつ話したものである。また、書体の変遷と隸変の特徴を捉える上で必要な着眼点についても随時述べた。

漢隸の成立については従来、裘錫圭氏の「遅くとも昭帝、宣帝には完全に形成されていた」とする説が有力で、高等学校書道の教科書もこれに従うものが多かったようである。しかし、そもそも何によつて近代書体の完成とするかが明示されて来なかったことや、肝心な武帝期の有紀年資料が少なかったこともあって、多少認識のズレは生じていた。しかし、近年出土した資料を丁寧に見ていくことで、その辺が明らかになってきたと考えている。

まず秦駉玉版に見られる篆書の中には、すでに隸書の字形が五、六字あることを指摘し、続けて秦駉玉版乙版の中央から下部にかけての右下がりの字は、後の左軽右重の八分へと成長していく書法の萌芽であろうことを述べた。

商鞅方升にある「為」という字のような象形から成る文字は、時代によつて足や尻尾の方向が異なるので、点画の変遷を見るのに適していると言える。書体字典を用いて甲骨文字から楷書まで、一通り調べてみると、紀年のない資料をどこに置いたらよいか推定できる」ともあり、勉強になる」とも図示した。

甘肅天水の秦墓竹簡の書法には、縦横の軽快なリズムがあつて、この筆法が後には、円転していた箇所の方折化へと繋がる。このような簡略、連続、省略などの隸変の特徴を知るには、基本点画、結構法ごとに観察し、例えば「フ」はいつから三点になったか、「七」の終筆が曲げて短横になるのはなぜかなどと、疑問を持つことが大切である。「水」という字は、水が縦に流れる象形だが、青川木牘ではもう「フ」に作り、武帝の時には字形が横長になり、横に流れる水に変わる。「天」は、古代書体では五画で書かれるが、近代書体になると四画になる。「月」

は、甲骨文字では側面形を象るが、時代が下るにつれて右回転が加わり、漢隸では九十度回転した形となる。「女」も同様で、甲骨文字や金文に比べて、古隸では四十五度、漢隸になると九十度回転する。

このように、画数の増減や字形の回転、または重心移動、空間の変化という視点も、書体の変遷と確立を理解する上で重要である。また草書を学ぶ際にも、篆書の筆順や構造を引き継ぐ多彩な秦隸も併せて学ぶ方が、より理解が深まることを説明した。



漢隸の成立を示す要素としては、縦画、横画に見られる波勢、波発の有無、右下が重い半台形の概形、あるいは文字の構造に篆書の骨格が残っているか否かに加えて、点の確立や、点画の接続部の変化を見る必要がある。例えば「糸」という字は、漢隸になると線だった部分が点になるが、この「点の独立」こそが、古代書体と近代書体の分かれ目という訳である。以上のような考察の結果、漢隸は、景帝、武帝初年にかけて成長し、武帝晩年までに急激に成立したものと捉えられた。景帝時代の鳳凰山や武帝初期の銀雀山の簡牘では、まだ成立していないと考えられるので、恐らく武帝中期から晩期の二、三十年の間には完成したのではないかと見ている。

七巧板は、日本では知恵板とも呼ばれる玩具だが、これを用いて文字を制作した趙之謙に倣って、七巧板作品「遊学」(挿図)、「金石楽、書画縁」を作った。これらについても併せて紹介させて頂いた次第である。

遠方よりご来場頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。

平成26年度 会計決算報告書		
	項 目	決 算 額
収 入 の 部	個人会員会費	2,726,000
	団体賛助会費	550,000
	大会参加費	350,000
	大会懇親会費	166,500
	その他の収入	65,873
	本年度収入計	3,858,373
前年度繰越金	7,337,018	
収入合計		11,195,391
支 出 の 部	編集局経費	489,080
	「学会展望」準備費	90,000
	国際局経費	0
	国内局経費	89,147
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	162,000
	学術局経費	0
	研究局経費	0
	会報編集委経費	0
	ホームページ委経費	194,400
	事務局経費	
	会議費	2,589
	荷造送料	486,652
	遠隔地役員交通費	30,880
	選管費	
	名簿発行費	
	通信費	360
	事務消耗品備品費	8,416
	事務委託費	692,280
人件費	60,000	
諸学会費	2,000	
予備費		
本年度支出計	2,607,804	
次年度繰越金	8,587,587	
合計		11,195,391

平成27年度 会計予算報告書		
	項 目	予 算 額
収 入 の 部	個人会員会費	2,800,000
	団体賛助会費	550,000
	大会参加費	350,000
	大会懇親会費	160,000
	その他の収入	30,000
	本年度収入計	3,890,000
前年度繰越金	8,587,587	
収入合計		12,477,587
支 出 の 部	編集局経費	700,000
	「学会展望」準備費	100,000
	国際局経費	300,000
	国内局経費	300,000
	大会運営費	200,000
	大会準備費	100,000
	大会懇親会費	160,000
	学術局経費	100,000
	研究局経費	500,000
	会報編集委経費	30,000
	ホームページ委経費	300,000
	事務局経費	
	会議費	30,000
	荷造送料	500,000
	遠隔地役員交通費	400,000
	選管費	50,000
	名簿発行費	200,000
	通信費	8,000
	事務消耗品備品費	10,000
	事務委託費	700,000
人件費	100,000	
諸学会費	2,000	
予備費	7,687,587	
本年度支出計	12,477,587	
次年度繰越金	0	
合計		12,477,587

- 本年度の第26回大会は、平成27年10月3日・4日の両日、國學院大學渋谷キャンパス・常磐松ホールにおいて開催された。初日冒頭、例年通り本年度総会が開催された。総会は、高橋利郎副事務局長の司会で、萱のり子国内局長の開催の辞ではじまった。國學院大學・赤井益久学長による開催校代表挨拶、澤田雅弘理事長の挨拶に続き、大野修作副国内局長を議長に選出して議事に入り、以下の議事及び報告がなされた。なお、議事については、いずれも満場一致で可決された。
- 〈議事〉
- ▽平成26年度決算・事業活動報告案 (高城弘一事務局長)
 - ▽平成26年度決算案監査報告(杉浦妙子監事)
 - ▽平成27年度予算・事業活動案 (高城弘一事務局長)
- 〈報告〉
- ▽編集局報告(中村伸夫編集局長)
 - ▽学術局報告(森岡隆学術局長)
 - ▽国際局報告(富田淳国際局長)
 - ▽国内局報告(萱のり子国内局長)
 - ▽研究局報告(河内利治研究局長)
 - ▽会報委員会報告(小川博章副会報委員長)
- 〈連絡〉
- ▽大会日程等説明 (橋本貴朗幹事・会場校責任者)
 - ▽事務連絡(高城弘一事務局長)

国内局

本年度の大会は、平成27年10月3日(土)、4日(日)の両日、國學院大學において開催されました。全9件の研究発表、佐野光一先生の特別講演会、本大会のために会期前倒しで催された博物館での特別展示など、充実した内容となりました。大会運営に「尽力いただいた関係各位に感謝申し上げます。内容の詳細は、別稿の大会報告をご覧ください。」

来年度の大会は、滋賀大学を会場として、平成28年10月1日(土)・2日(日)に開催する予定で準備を進めています。日程は開催校の行事などとの関係で変更になる場合があります。詳細は、追ってご連絡いたします。

(国内局長 萱 のり子)

国際局

本年度も、中国大陸・台湾・韓国・アメリカの博物館や美術館で開催される特別展・常設展について、各施設がウェブ上で提供する情報にすぐアクセスできる展覧会案内をホームページに掲載しました。また、九月十六日から十八日まで、北京の故宮博物院で開催された二〇一五「石渠宝笈」国際学術研討会の子稿集の目次を掲載し、発表者と演題を一覧できるようにしました。今後とも、海外での最新の動向をお伝えすべく、各種の情報を発信したいと思えます。

(国際局長 富田 淳)

学術局

J-STAGE/CsC

昨年十一月に刊行されました学会誌『書学書道史研究』二十五号は取載本数が多いことから、半年後のJ-STAGE(ジェイ・ステージ)登載はかないようにありませんが、できるだけ早く公開できるように努めます。なお公開時には、学会ホームページでお知らせいたします。

東洋学・アジア研究連絡協議会について

昨秋の学会大会や学会ホームページでお知らせしましたが、書学書道史学会など三十三の正会員学協会とオプザバーの三学会から成る右記協議会の二〇一五年度総会が、十二月十九日(土)に東京大学法文二号館で開催され、シンポジウム「東洋学・アジア研究の新たな振興をめざして」PARTIIIも開催されました。

日本学術会議第一主催シンポジウム

昨年六月の文科省からの通知「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」で、教員養成系や人文社会科学系の学部・大学院の「組織の見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」が要請されたことに対し、日本学術会議が七月末日にシンポジウムを実施しました。東洋学・アジア研究連絡協議会を通しての案内でしたので、学会のホームページでも掲載しました。

データベース「学会名鑑」について

日本学術会議・日本学術協力財団・科学技術振興機構連携の標記データベースが今年三月末の予定でリニューアルされます。本学会のデータも折々に更新してまいります。

<http://gakukai.jst.go.jp/gakkai/control/toppage.jsp>

(学術局長 森岡 隆)

研究局

研究局から、①平成27年度審査報告、②平成28年度助成金制度、③育志賞の三点を報告致します。

①平成27年度「特定領域研究促進助成金制度」への応募者が一名ありましたが、残念ながら採択されませんでした。

②これまでの「特定領域研究促進助成金制度」は、平成28年度より次世代を担う研究者の研究を促進することを

目的として、「特定領域」をはずした「研究促進助成金制度」に生まれ変わります。会員各位の研究課題の計画を募集し、応募のあった研究計画から優れた成果又は有用な成果が期待できる計画を選定したうえで、研究推進助成金を支給し、翌々年に成果の提出を義務づけ、書学書道史の研究促進と振興に寄与しようとするものです。「研究促進助成金規程」「研究促進助成金制度審査規程」「平成28年度研究促進助成金制度募集要項」「平成28年度研究促進助成金制度応募研究計画書」がホームページに掲載されていますので、まず「一読下さい。」

■研究期間：平成28年度～平成29年度

(平成28年9月1日～平成30年8月31日の

二年間)

■研究促進助成金：二件につき30万円

■申請受付期間：平成28年6月1日(水)

～6月7日(火)

■申請方法：ホームページ掲載「平成28年度研究促進助成金制度応募研究計画書」(Word形式)をダウンロードし、受付期間内に下記問い合わせ先

までEメール(添付ファイル)で申請して下さい。

■問い合わせ先：shogaku@ninkoop.or.jp

■問い合わせ方法：Eメールのみ(平成28年度研究助成

金制度) 問い合わせ先：(記入下さい。)

③本年度から新たに研究局が職掌局となる「育志賞」に

ついて、日本学術振興会では、若手研究者を支援・奨励するための事業の一環として、優秀な大学院博士課程学生を顕彰すべく、「育志賞」という制度を設けています。この賞への応募は、大学長の推薦か、学会長の推薦のいずれかを要件としています。本学会では、先日の理事会で「日本学術振興会育志賞への推薦に関する規定」を定め、この賞に応募する方々を推薦する体制を整えました。詳しくは

本学会のホームページに掲載しますので、「一読のうえ、

該当の方はふるって応募願います。

平成26・27年度の研究局は、永由徳夫副局長、権田瞬一・角田健一両幹事と私の四名で運営しております。26年度は研究局会議を一回開きましたが、27年度はメールのやり取りで進めました。研究局に関するご意見等がございましたら、何なりと上記問い合わせ先までご連絡下さい。
(研究局長 河内利治)

編集 集局

学会誌『書学書道史研究』第25号は、全一八〇頁という大冊となりました。これまで以上に数多くの論文が寄せられ、査読にはじまり、編集局による最終校正に到る一連の作業に時間を要したため、刊行がおくれ、会員諸氏の送付も十一月の中旬になつた次第です。論文四編、研究ノート五篇、花園大学で開催された第25回大会での特別シンポジウムの紹介、日本書道史関連の学界展望と、盛り沢山な内容となりました。尚、本号からは最終箇所に執筆者一覧を設けました。

第26号への投稿論文の提出締め切りは平成二十八年三月三十一日(厳守)です。國學院大學で開催された第26回大会での研究発表者はもちろんのこと、ひろく会員諸氏からの投稿をお待ちしています。論文の投稿規定等については書学書道史学会のホームページをご覧ください。編集局の事業につき、ご質問やご意見、あるいはご要望がある場合は、編集局担当者(中村伸夫、菅野智明、増田知之)までお願い致します。
(編集局長 中村伸夫)

事務 役局・会報 天女 員会

第14期役員選出選挙について

本学会の現第13期役員会(理事・監事は、平成28年3月31日をもって任期(2年)満了となることから、新たに第14期役員選出のために選挙を実施します。詳細については、同封別紙(「役員改選選挙の告示と投票」について)に記載のとおりです。会員各位におかれましては、本学会創設以来、守り続けている民主的運営の美風を堅持するた

めにも、すべての会員による投票をお願いします。

なお、選挙管理委員会については、第13期役員会発足時、すでに理事会で承認された、以下の委員会メンバーによって構成、および実施されることが決定しています。

選挙管理委員会

- 委員長 杉浦妙子
- 委員 柿木原くみ、高城弘一、永由徳夫
- 委員 亀澤孝幸、亀田絵里香(以上、会員枠より2名)

「選挙名簿」と「会員名簿」について

第14期役員選出選挙にあたり、「選挙名簿」を作成します。本名簿に登録される方は、平成28年4月1日現在、満68歳未満の会員です(「選挙管理規程」第3条による)。ただし、当選後の資格審査の関係上、平成25年度より会費滞納(住所不明含む)の方は、上記年齢に達していない場合であっても、本名簿には登録されていません。

なお、前期には「会員名簿」が発行されませんでしたが、今期は個人情報保護を十分配慮した上で、発行する運びとなりました。合わせて、ご覧ください。

「平成28年度・第27回書学書道史学会大会会場(予定)のお知らせ」

毎年、書学書道史学会大会は、西日本、東日本と会場を交互に移して、実施してきました。平成27年度は、國學院大學(東日本)での開催により、平成28年度は、西日本において開催します。理事会等の推薦もあり、中村史朗会員の本務校である滋賀大学で、10月1日・2日を開催日として予定しています。ご承知おき下さいますようお願いいたします。詳細は、国内局の報告をご覧ください。

「学生会員から一般会員の手続について」

本学会では、学生会員の「有期会員制」を導入しています。この制度は、学生会員(学生会費適用の方)が大学院を修了、もしくは満期退学・自主退学、その他の理由によ

り学籍を失った(学割証の発給対象でなくなった)時点で、学生会員資格を、一旦終了とするものです。該当の方が引き続き本学会会員に留まろうとする場合、以下の会員変更手続きが必要となります。会員変更手続きの用紙が、学会ホームページにアップしてあります。ホームページの「入会申込書」を選択し、「会員変更申込書」をダウンロードして、必要事項を記入の上、学会事務局へ送付して下さい。また、当該会員手続きは、届け出制度となつて

いるため、理事会での資格審査はありません。したがって、書類提出のみで学生会員資格の終了時点から自動的に一般会員資格が付与されます。今春に学生会員資格を失う方は、早めに手続きをお願いします。送付先は左記のとおりです。

事務局の連絡先

- 〒166-8532
- 東京都杉並区和田3-30-22
- 大学生協学会支援センター内
- 書学書道史学会事務局
- TEL:03(3307)1175
- FAX:03(3307)1196
- メールアドレス:shogaku@univ.coop.or.jp

※電話での応答は「大学生協学会支援センター」となります。

支援センター内の学会担当者:井手富士雄
(事務局長・会報委員会委員長 高城弘一)

新入会員紹介 事務 役局

一般会員

- 田上哲也
- 橋本栄一 東京学芸大学准教授
- 剣持翔伍 筑波大学大学院生
- 徳泉さち 早稲田大学大学院生
- 松本美恵 関西大学大学院生
- 水野有砂 佛教大学大学院生

※平成27年4月〜同年9月に申請された方

書学領域拡大への願い

魚住 和晃

人間は生まれながらにして言葉がわかり、文字を書けるわけではない。あくまでも外的な影響、また教育によって培われるものである。この言葉と文字にかかわる能力は人間のみがもつもので、それが身体能力に劣る人間が、動物界の支配者になりえた要因の一つになっている。

近年は脳科学が発達して、人間の言語能力が脳内のいかなるメカニズムによってなるものが明らかにされてきている。それは脳内に分布された運動性言語野、聴覚性言語野、視覚性言語野、感覚性言語野、文字の読み書きにかかわる言語野に区分される言語野の存在で、文字に対する造形感覚はこのうちの文字の読み書きにかかわる言語野において形成され、発達するものである。

脳内で反応された字形概念を、筆記具によつて筆跡として具示させるのが大脳運動野である。大脳運動野は脳の中央部から側頭部の左右に対称形に分布されており、指に関する領域が多く与えられ、とくに親指の領域は、他の四指の領域を合してもまさる程に大きい。執筆における指法について、例えば撥燈法であるとか捻筆であるとか、親指の用法に関して重点が置かれるのは、ここからうなずける。また、字形の観察力が乏しいとか考えていないとか、あるいは頭でわかつていても思うように書けないとかいうことも、これら大脳内の仕組みを知ることによって、どこに不足があり、何をどう改めるべきかの基本的な問題が、自ずから感得されることであろう。

ところで書学とは、かくして記された筆跡のいかに優れたかを研究する学問分野である。逆に、なぜ優れたかを根拠づけるために労を費やすことはま

ずありえないし、評価も得にくいことだろう。この当り前の通念が、ややもすれば書学を窮屈にし、一般社会に対して垣根を作っているような気がしてならないのである。

この筆跡の巧拙の概念をとりはずし、筆跡という営み全般を研究対象にしたものが筆跡学である。例えば古文書学は古文書の筆跡を判読する技術性が重きをなすところから筆跡学の範疇に取り込むことができ、竹簡・木簡における写字行為も筆跡学として捉えるならば、論点を幾段も多彩にすることができると違いない。私が神戸大学に在職していたとき、日本では書道愛好者は圧倒的に女性によつて占められているのに対し、中国では書法が男性の趣味であることと相違が何によるものかについて取り組んだ院生があった。これはむしろ社会学に近いテーマであるといえよう。

筆跡を分析する科学性が、将来に向けて社会に貢献できる可能性に目を向けたとき、そこには多大な広がりを感じられる。例えば社会における文字造形認識の変化や時代に対応した文字造形効果の分析は非常に重要なことであり、心理の動きや働きと筆跡との相関関係、高齢者の知力の減退と筆跡との関係、書道(筆跡能力向上に打ち込むこと)の健康と知力維持における効果、筆跡によるリハビリ効果と回復観察、脳障害者に対する知育と心理的効果など枚挙にいとまがない。

前述したとおり、人間が文字を書く身体的メカニズムははつきりしている。書学が書法にいそむ人によつて形成されていることから、筆跡学はとくに誰でなくてはならないということはなく、むしろ問題はそこに興味をもち、書学によつて社会に貢献する気があるか否かにかかっているのである。少なくともこの書学書道史学会にこの学問のあり方が認知され、書学の領域が拡大されて、いわば社会派ともいべき書学者の登場と活躍あらんことを願うものである。

点視

中朝書法史における比較研究の試み

—法帖の刊行を例として—

増田 知之

去る九月二十一日、U-PARL(東京大学附属図書館アジア研究図書館上
廣倫理財団寄付研究部門)主催の公開討論会「朝鮮時代公文書における草書
—東アジア書文化比較研究の試み—」にコメンテーターとして参加するという
貴重な機会を得た。本討論会では、韓国の古文書研究者である沈永煥氏が自
著『朝鮮時代古文書草書体研究』をもとに報告され、朝鮮時代において「告身」
・「試券(科挙答案紙)」・「朝報(官報)」等の公文書に多様な草書表現が展開し
ていたこと、またそこに王羲之や趙孟頫といった中国書の影響が顕著に認められ
ることなど、実に興味深い研究成果を披露された。

沈氏の多岐にわたる議論の中で最も興味を惹かれたのが、李朝における国王
らによる書文化への積極的介入である。『文宗実録』の記述によれば、書人とし
ても名高い李瑋が肝煎りとなって、校書館において「歴代帝王名賢集古帖」、王
羲之「真行草三体」、趙孟頫「真草千字」等の諸法帖が刻されており、また『世祖
実録』によれば、鑄字所に対して、校書館所蔵の「集古帖」、趙孟頫「証道誦」、
「真草千字」、王羲之「東方朔伝」・「蘭亭記」など特定の法帖を刻して成均館に
送り、学生の「楷範」とするように命じている。『世祖実録』には更に、礼曹に対
し、法帖を国中に広めるため趙孟頫「真草千字」等の書蹟の進上を促すよう指
示する記述が確認できる。右の如く李朝においては、国王ならびに王族(換言
すれば国家)が主導して、「楷範」とすべき法帖の選定・制作・頒布を推進してい
たのである。かような「書文化政策」によって、沈氏が検討を加えた草書はもと
より、各書体における特定書風の流行から権威化、更には固定化へと繋がって
いったと推察し得る。

(11)で、同時代の中国に目を向けてみると、明朝では皇帝みずからが法帖を

刊行した形跡はなく、ただ王府によって『東書堂集古法帖』や『宝賢堂集古法
帖』など数種の法帖が刊行されているに過ぎない。また、それら刊行事業を取り
仕切った朱有燾の「以便自觀、非敢示於人以爲学也」、朱奇源の「置之齋中以留
示我後人、非敢伝於士林間也」という発言に端的に表れているように、両帖は
いずれも江湖に広めるためのものではなく、あくまで彼ら自身の「趣味的領域」
内での鑑賞物であったといえる(ただ後者については、弘治帝の御札に「以爲藩輔
之光」との語が見え、皇帝と王府との関係保全のために法帖が利用された例と
もみなし得る)。更にいえば、明代の中国においては、権力側からの書に対する
「文化的コントロール」の度合いは極めて低かったのであり、かような状況が江南
地方を中心とする「民間」での多様な書文化の活況を現出させ、ひいては当時の
出版文化を背景とした「家刻」法帖の隆盛を促したとも考えられよう。

一方、明朝を継いだ清朝においては、康熙帝、乾隆帝ら満族皇帝による書文
化政策が強力に推進され、法帖の刊行事業も空前の活況を呈した。歴代皇帝
中最多の法帖刊行数を誇る乾隆帝は『三希堂石渠宝笈法帖』の刊行目的につい
て、「以昭書学之淵源、以示臨池之模範」とその論旨の中で明確に述べている。
まさに、先の朝鮮国王らの書文化政策にも通底する、いわば国家的な「書文化
支配」への意思を読み取ることができるのではないか。また、かような刊行事業の
前提として、絶大な皇帝権力による大規模な書跡収集活動があったに相違な
く、ために銭泳『履園叢話』が指摘するような法帖の質的变化を生ぜしめ、結
果として「碑学」の隆盛する素地が整ったとも解し得るのである。

今回の討論会で行った種々の「比較研究」を通じて、個別地域における文化事
象を「相対化」させる重要性、すなわち漢字文化をその共通要素とする「東アジ
ア世界」の中で、中国や朝鮮、更にはわが日本において展開した書文化の諸相
を、今一度「東アジア」という枠組みで捉えなおす有効性を改めて痛感した次第
である。今後、かような学際的、横断的な書法史研究が展開され、各分野の学
問的蓄積がより大きな知(書)の体系の構築へと発展してゆくことを切に望んで
いる。

集中豪雨

安生 成美

「新築の記念に、作品を書いて下さい。」
 昨年末、勤務校の同僚の先生からお声を掛けていただいた。私で良いものかと不安もあったが、日頃の感謝の気持ちを込めて半切軸を贈らせていただいた。

今年の九月、台風十八号による集中豪雨で、茨城県常総市の鬼怒川が氾濫した。鬼怒川が決壊したその日、新築のお住まいが常総市であったその先生からの連絡があった。先生の家は一階が水没し、ヘリコプターで救助されたとのこと。想像以上の浸水の中で、半切軸を抱えて二階へ避難した。涙が止まらなかった。

あの日は勤務校も休校となり、ヘリコプターが上空を往来していた。心細い中、多くの先生方や先輩、友人から心配する連絡をいただいた。この場をお借りして御礼申し上げます。そして、一日も早い復興を心より祈念いたします。

二〇二〇「長屋王願経」

加藤 詩乃

この秋、根津美術館で特別展「根津青山の至宝」が開催された。名品が惜しみなく陳列された展示会の充実ぶりに感動の連続であったが、ここでは二階の展示「古経同好会」について触れたい。本展示室では根津美術館が所蔵する貴重な古写経が陳列さ

れていた。中でも「長屋王願経」の「和銅経」と「神亀経」が並べて展示されていたことに驚嘆した。二一〇巻が現存している「和銅経」に比べ、「神亀経」は十巻足らずしか伝わっていないため、両経共に所蔵する館は珍しく、同時に鑑賞できる機会は滅多にない。両経を目の前にすると、まだ底本となつた中国の写経の面影が強く残る「和銅経」に対し、十六年後の「神亀経」はすっかり我が国の写経体の字姿をみせている。奈良写経前期における写経体の成立過程が垣間見られる貴重な機会であった。

外の世界から見た景色

高田 智仁

現在の勤務先では、主として近世から近代までの地方文書に囲まれたなかで日々を過ごしている。取り扱う対象が古文書のため、席を共にする人たちも当然「史学」専攻の出身者が多い。

そうした環境にあつて、「書道学」を専攻した人間というのは珍しいものらしく、驚かれると同時に必ず「では筆で字も書かれるんですね」、「じゃあ字も上手いんですね」と痛く感心される。初めのうちこそ「エイエイ、ソノヨウナトホ…」と言葉を濁してやり過していたが、近頃ではこの「素朴な質問」は良きにつけ悪きにつけ「書道学」を考えるうえで大きな意味を持っているように思えてならなくなつた。

他の学術領域に映る「書道学」、その景

色を垣間見られたことは、視野を広げるうえで予期せぬ収穫であつたと感じる次第である。

デジタル時代の法帖研究はいかに？

成田健太郎

今年度より大学図書館に勤務しているが、全国の学術機関には研究資料のデジタル化・オープン化の波が押し寄せ、そのために多くの労力と予算が割かれている。書学書道史の分野でも、書跡のデジタル公開の動きは徐々に進んでいると思うが、法帖についてはどうだろうか。帖学は版の異同や偽帖の問題など、情報の量もものを言う研究分野であり、大量の資料がデジタル公開されればブレイクスルーも期待できる。当面の課題は、実務を負担する図書館員が法帖に関する知識を持たず、また習得も容易でないこと、さらに各データにいかなるメタデータ(書誌)を付与すべきかノウハウが確立していないことである。今後人文情報学や図書館情報学の分野との連携が望まれる。

編集後記

◆青銅器の器形拓本創始者は馬起鳳あたりかと調べていたところ、馬起鳳の題記に「先師云々」とあつたので、さらに先がありそうです。(小川)

◆本年は清水比庵没後四十年で遠山記念館、高梁・笠岡両市に加え横浜では令孫固

氏による展示会もなされた。二百点ほど鑑賞した。(柿木原)

◆朝靄立ちこめる中、金刀比羅宮を参詣してきました。七八五段の向こうに広がる境内は、静けさと薄暗さが相まって、より神聖な雰囲気を感じました。(金子)

◆同種の複製本でも個体差が存するようである。殊に戦前に製作されたものは手作業であつたようで、精巧すぎるが故、原本との差異を確認しておきたい。(野中)

◆中国で小中学校での書法教育が始まつた。指導者不足が深刻で十分な指導が行われていない学校がある様子。今後どのような対策を講じるのか気がかりである。(藤森)

◆毎年恒例の東京国立博物館・台東区立書道博物館の連繫企画が始まりました(一月三十一日)。今回は、顔真卿をはじめとする唐時代の多彩な書にスポットが当てられています。東博平成館では秦王朝と始皇帝にまつわる文物が展示された特別展「始皇帝と大兵馬俑」も開催中(二月二十一日)。上野で中国文化を堪能してみたいかがでしょうか。(六人部)

◆近代以降、雲紙(打雲、打曇とも)天地二重ずつの規則正しい山・谷形が気になつていた。一枚の懐紙から八本の短冊がとれることを考えれば、その規則性こそが重要。不公平なく、一本の短冊に天地とも二山二重ずつ配されることになろう。(高城)